

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 仙田直人 会員数 約16,200名)

TEL 0422-46-4181

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）について、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では本試験「世界史A」と「世界史B」の全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式等などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

#### 1 はじめに

今年度のセンター試験が、ここ数年来の傾向を継承し、問題の内容やレベルともに教科書に準拠しており、日常の授業でほぼ対応できるものになっていることは、センター試験の本質を踏まえたものとして有り難く受け止めている。その一方、例年指摘させていただいているように、設問文だけで答えが導き出せる「基礎的な知識及び技能」に偏った出題がいまだに改善されておらず、極めて残念でならない。

学力の3要素として、学校教育法第30条では「基礎的な知識及び技能」「思考力・判断力・表現その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」をあげている。これらを高等学校「地理・歴史」に当てはめてみるならば、歴史的事象を時間軸や空間軸など多元的な観点を踏まえた視点から検討したり、複数の事象間の関連や因果関係を考察したりすること、歴史的事象についての様々な解釈を比較してどちらにより客観性や妥当性があるかを考えたりすること、つまり歴史的思考力を涵養することであると言えよう。センター試験では、基礎的な知識の確認はなされているものの、思考力・判断力<sup>かん</sup>の確認、すなわち歴史的思考力を発揮して解答に至るような問題作成という点においては不十分であると思われる。出題者の方々が意欲的にテーマ設定やリード文作成をしてくださっていることは、問題を見ただけで十分に読み取れる。だからこそ、設問も一貫してそのテーマに沿うとか、リード文を熟読する中で解答が引き出されるような思考力を問う設問とか、リード文の全文を読まなければ解答できないなどの仕掛けを用意していただくことを、今後、ぜひ御検討いただきたい。同様に、地図や写真、図表なども、また然りである。

この出題形式の良否は、高等学校の授業に直結する重要な問題であると考えている。マークシート方式という制約があるのは承知しているが、リード文を熟読することでしか解けない出題が増えることで、知識・理解だけでなく、資料活用能力を見る設問も増加し、単なる暗記物に終わらない、本格的な高校世界史の授業が実現できることを私たちは期待している。センター試験が大学入試問題の一方の頂点に立つべく、更なる御検討をお願いする。

以下、今回のセンター試験「世界史A」と「世界史B」の試験問題について、限られた紙面の中ではあるが、御検討の一助となることを願って、本協議会としての意見と評価を記す。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

##### (1) 「世界史A」について

昨年同様、「世界史B」との共通問題はなかったが、大問が4題、小問33問は昨年と同じであった。

時代別の出題は、正解を基準として選択肢から判断すると、前近代が6（昨年3）問、前近代と近代に関わるものが1（昨年1）問、近代が15（昨年15）問、近代と現代に関わるものが1（昨年2）問、現代（高等学校学習指導要領「(3)現代の世界と日本」に該当する部分）が13（昨年9）問、うち第二次世界大戦後史が8（昨年6）問であった。全体の割合で言えば、「近現代史を中心とする」高等学校学習指導要領の目標にほぼ合致した内容であった。

分野別では、政治史の知識・理解を問う問題が27（昨年23）問と大きな割合を占め、文化について問う問題が3（昨年3）問、経済について問う問題が7（昨年3）問で、教科書における文化史のボリュームを考慮すると適切であると思われる。

地域別では、非欧米地域は18（昨年19）問、欧米地域が15（昨年14）問である。昨年同様に諸地域からバランス良く出題されており良い。

問題形式では、正しいものを選ぶ設問が16（昨年13）問、誤っているものを選ぶ設問が2（昨年2）問、空欄を補充する問題が5（昨年4）問、二つの正誤組合せ判定が5（昨年2）問、年代順に並び替える問題が2（昨年2）問、地図と事項の組合せ問題が1問、年号中に事項を当てはめる問題が2問出題された。また、地図が1点、図版が1点、年表が2問使用された。地図や図版を用いる意図も適切であり良い。更にグラフの読み取り問題が出題され、歴史的思考力を測る問題として適切である。

#### 第1問 「植民地の形成・拡大・支配の在り方」

Aは「イギリス帝国の叙勲制度」に関連しての出題。

問2「ホセ＝リサル」は、やや細かい。

問3「オーストラリア連邦が成立した時期」を年表中にあてはめる問題については、オーストラリア連邦がカナダ連邦に次ぐ2番目のイギリスの自治領と判断するのは難しい。

Bは「オランダの東南アジア支配」に関連しての出題。

問4「開発独裁」については、やや細かい。

問5「アキノ（コラソン＝アキノ）」は細かい。ほとんどの教科書に掲載されていない。

問6「植民地数の増減を示したグラフ」を題材とした問題が出題され、資料の読み取りと時期についての理解を総合的に判断する力が問われた。思考力を問う問題としては適切である。

Cは「ヨーロッパの修道会の布教活動」に関連しての出題。問題はない。

#### 第2問 「世界と日本の結び付き」

Aは「朝鮮王朝の『海東諸国紀』」に関連しての出題。

問2「漢王朝と明王朝の最大領域を比較する」問題は、中国東北部が含まれるかどうか判断の基準となるが、やや難しい。

Bは「江戸時代の日本人」に関連しての出題。

問5「海底電信ケーブルが世界で初めて敷設された時期」を年表中に当てはめる問題であるが、掲載されている教科書が少なく、やや細かい。

問7「ダヴィド」については、「ナポレオンの戴冠式」の図版及び作品名は掲載されているものの、作者名まで掲載されているものは多くはなかった。

Cは「中国の熱河」に関連しての出題。問題はない。

#### 第3問 「ヨーロッパのキリスト教世界」

Aは「フランスの聖職者の著書」に関連しての出題。

問2は、「ビスマルクによる社会保障制度」については、やや細かい。

Bは「ヨーロッパ世界の文化に対するイスラームの影響」に関連しての出題。

問6は、「トルコが北大西洋条約機構（NATO）に加盟した」ことは、地図からのみ判

別できる程度で、難しい。

#### 第4問 「第二次世界大戦以降の国際関係」

Aは「ヨーロッパの地域統合」に関連しての出題。問題はない。

Bは「キューバ・ベトナムのアメリカ合衆国に対する姿勢」に関連しての出題。

問7「東ティモールが独立した」ことについては、地図に掲載されているのみであり、やや細かい。

問7「ペロポネソス戦争」については、掲載されている教科書が少ない上に、内容が誤っていることを選択させる問題となっており、難しい。

最後に、毎年お願いしていることだが、「世界史A」を問題作成される先生には高等学校学習指導要領を熟読の上、各社の「世界史A」の教科書を精査して問題作成に当たっていただきたい。「世界史A」の受験者は、「世界史A」専用の参考書などがほほない中で、教科書のみで学習するケースが多いと考えられる。一方、「世界史A」の教科書は各社の特色が色濃くでており、記述内容は様々であり、取り上げられている事項も異なる。「世界史A」は「世界史B」の内容を薄めたものではない。高等学校学習指導要領の趣旨・内容に沿った上で、是非とも「世界史A」で受験する生徒の立場に立った問題作成をお願いしたい。

#### (2) 「世界史B」について

例年どおり大問4題で、小問数は2005年度から13年続いて36問となっている。試験時間は60分間で配点は100点満点である。昨年度同様、「世界史A」との共通問題はなかった。

出題形式を見てみると、正誤判定問題の総数は昨年度並みの20問であったが、誤文選択が昨年度の4問から2問に減少した。正文選択が18問出題されているため、誤文選択とのバランスは取れていない。2文の正誤の組合せ問題は5問出題と昨年度と同じであった。年代整序問題は1問のみで6択での出題であった。年表問題は2問出題であった。正誤問題については平易な問題が多かった一方で、地図問題が昨年度の2問から4問に増加し、そのうち1問は河川や運河の位置を判定する問題であり、これまでに見られない問題であった。また、昨年度に引き続きグラフの読み取り問題が出題された。現行課程においては、「資料の活用」が重要視されているので、今後グラフの読み取りだけでなく、年表や図表、文献資料や図・絵画・人物画など様々な資料の読み取りを求める出題がなされる可能性がある。日頃から教科書や図説を活用し理解することを意識したい。

次に、昨年度9問出題された文化史の問題が3問と大幅に減少し、代わりに社会経済史関連の問題が33問（昨年度が27問）と増加した。時代の偏りはなく、前近代と近現代とがバランス良く出題された。地域別に出題内容を見てみると、東アジア関連5問（昨年度9問）、西アジア関連4問（昨年度4問）、南アジア関連2問（昨年度1問）、東南アジア関連1問（昨年度0問）、ヨーロッパ関連11問（昨年度14問）、アフリカ関連2問（昨年度1問）中南米関連4問（昨年度0問）、中央アジア関連1問（昨年度0問）、ヨーロッパと南アジアに関わる問題、ヨーロッパとアフリカに関わる問題、オセアニアと南極に関連する問題、アメリカと西アジアに関わる問題がそれぞれ1問、ヨーロッパと東アジアに関わる問題が2問出題された。欧米や中国に関連する出題が減少し、西アジア・東南アジア・アフリカ・中南米など多様な地域からの出題が増加し、広範囲の地域から満遍なく出題されたと言える。20世紀以降の出題が例年よりも多かったため、戦後史を含めて学習が手薄になっているかどうかで差がついたであろう。最後に、日本国憲法や治安維持法など、日本史に関連する選択肢を含む問題が2問出題された。世界の歴史を日本の歴史と関連付けながら理解することが重要視されているため、今後も継続して日本史に関連する内容を問う問題が出題されると考えられる。世界と日本の歴史や文化における関わりを常に意識す

る視点を、日頃の授業で養いたい。出題内容全体を見ても、地域・時代ともに幅広い基礎力が問われる標準的な問題となっており、高等学校の「世界史B」で学ぶ内容から逸脱していない。昨年度に引き続き出題されたグラフの読み取り問題は、生徒の思考力を問う問題としては妥当であると考ええる。

#### 第1問 世界史上のマイノリティ（少数派）について

Aはローマ帝国末期以降のコプト教徒に関する文章から出題。

問1は世界史上のキリスト教の異端についての問題で、カタリ派に対してアルビジョワ十字軍が組織されたことはなじみの薄い内容かもしれないが、①～③の選択肢が基本的な内容なので容易に解答できる。

問2は、古代から近現代までのエジプトについて長期的な視点が問われたが、正誤判定の要素が他の問題よりもやや細かいので、差が付く問題であったと言える。

問3は地中海地域のキリスト教国について問われたが基本的な問題で平易に解答できる。Bはインドにおけるヒンドゥー教徒とムスリムとの共存と対立に関する文章から出題。

問4は1924年のカリフ制廃止がインドの出来事ではないので戸惑った受験者もいるかとは思いますが、インドにおけるムスリムの団結の契機となるベンガル分割令以降、インド独立までの歴史をしっかりと押さえることが重要である。

問5はムスリムの君主や王朝について問われたが、基本的な問題で平易に解答できる。

問6では、インドの海上交易について2文の正誤組合せの形式で出題された。aの南インドのチョーラ朝が海上交易を行ったことについて迷った受験者は多かったと思うが、教科書にも記述があるので判断できる。bのゴアを根拠地としたのはイギリスではなくポルトガルであることは容易に判断できる。

Cはロシアのドイツ系住民に関する文章から出題。

問7はロシアやソ連の対外関係について、近代から戦後までの大まかな理解が必要であるが、③以外の選択肢が明らかに誤っているので容易に正解できる。

問8では、1890年から1940年にかけてのイギリス・ドイツ・ロシア（ソ連）の銑鉄生産量の推移グラフからaとbの2文正誤が問われた。aでは第一次世界大戦の時期、bでは第二次五カ年計画の時期を判断することが求められた。受験者にはなじみのない銑鉄の生産グラフではあるが、第一次世界大戦の年代、第二次五カ年計画の時期を押さえておけば解答は難しくない。数値の変化について、その変化の理由や背景を多面的多角的に思考・判断することが求められる問題である。

問9では年表形式でチェチェン紛争勃発の時期が問われた。冷戦終結後に民族紛争が起こっていることを理解していると容易に解答できる。現代史は手薄になりがちなので、受験者によっては差が付く問題と言える。

#### 第2問 世界史上の革命や政治体制の変化について

Aは1791年憲法を中心にフランス革命における憲法と政治体制に関する文章から出題。

問1では、世界史上の憲法について誤っているものを答える問題であった。基本的な内容であり、容易に解答できる。日本国憲法の主権在民（国民主権）について問われた。

問2では、世界史上の議会や集会について問われた。基本的な内容であり、容易に解答できる。

問3では、世界史上の共和政や共和国についてaとbの2文正誤が出題された。aはルイ＝フィリップの亡命から二月革命を見いだせたかがポイントである。

Bは古代ローマ史家ミハイル＝ロストフツェフの『ローマ帝国社会経済史』の文章から出

題。

問4では古代ローマの政治体制について問われたが、基本的な内容であり、容易に解答できる。

問5では中世の西ヨーロッパの地図から、東方貿易に従事し、香辛料取引で栄えた都市の名称と位置を問われた。東方貿易がヴェネツィアであることが分かれば地図上の位置は容易に判断できる。

問6では、「故国で生じた革命」がどこの国のことなのかを、リード文からロシアであることを判断し、ロシア革命について述べていない文章を選べば良い。このように2段階の思考が必要な工夫された問題がこれから増えてくれば良いと考える。

Cは20世紀のアジアにおける革命と民主化に関連する文章からの出題。

問7では、昨年度は出題されていなかった中南米に関する問題である。メキシコ革命に関する正確な知識が問われており、受験者によっては差が付く問題であったろう。

問8では、昨年度に引き続き、国民政府の時期の中国について出題された。選択肢から、カイロ会談に参加した国についてや、汪兆銘に関する正確な理解などが求められた問題であった。

問9では、民主化政策や民主化運動について問われたが、基本的な内容であり、容易に解答できる。ただ、李登輝など戦後の人物が扱われ、学習が及んでいない受験者にとっては苦勞する問題であったと言える。

### 第3問 国家が諸地域を統合するために採用した制度について

Aはアッバース朝のカリフを中心とする中央集権的な支配体制の確立に関する文章からの出題。

問1では土地の管理や租税徴収について問われたが、基本的な内容であり、容易に解答できる。

問2は思想・言論・宗教に対する国家介入について日本の治安維持法について解答する問題であった。消去法でも解答できるが、この程度の日本史の内容であれば問題なく正解したい。現行課程で重要視されている世界史と日本史との関連について問われた問題であった。

問3では「未知なる世界」への探検が問われたが、極地探検という学習が及びにくい分野からの出題であった。アのスタンリーは判別が容易であるが、イの北極点と南極点の班別は、文章中に「ノルウェー」とあるため、難しかったのではないかと。

Bは中国における大運河と南北間の経済的統合に関する文章からの出題。

問4は、リード文の空欄アに入れる語句とその位置を地図から選ぶ組合せ形式の出題であった。リード文に「水運を通じて」とあるので、大運河の建設を選ぶのは容易である。南北間の経済的統合についての内容なので、地図はbを選ぶのも容易である。

問5では諸国家や諸勢力の間で起こった出来事としてアメリカ合衆国がラテンアメリカ諸国とともに米州機構を結成したことにに関して正確な理解が求められた。受験者の学習の習熟度により差が付く中南米についての出題であった。

問6では唐代中後期の時期の出来事について問われたが、②以外の選択肢が五胡や清についての内容なので判断しやすい問題である。

Cは中世ヨーロッパにおける騎士と、近代の国民軍に関する文章からの出題。

問7は世界史上の貨幣や貨幣制度についての出題で、五銖銭・交鈔・レンテンマルク・金本位制など、時代や地域が幅広く問われていた。しかし、基本的な内容であり解答は容易である。

問8は世界史上の傭兵や兵士について問われたが、基本的な内容であり、解答は容易である。

問9は国家の統治制度や軍事制度について2文の正誤組合せ形式で問われたが、プロノイア制が採用されたのがビザンツ帝国であることが分かれば容易に判断できる。同様に、bも容易に判断が可能である。

#### 第4問 世界史における自然環境・資源と人間との関わりについて

Aは16世紀のスペインのアメリカ大陸進出とイギリスやオランダの動向に関する文章から出題。

問1では、アメリカ大陸の地図からインカ帝国の位置とその征服者についての組合せを問われた。いずれも基本的な内容のため、解答は容易である。

問2ではアメリカ大陸の銀の移動について問われたが、空欄アの直後に銀鉱山とあるので、ポトシを入れるのは容易である。また、スペインの太平洋上の拠点がマニラであることも容易に判断できる。選択肢のイのフエには、ユエと括弧書きがあった方が良いと思われる。

問3では世界史上の海戦について問われたが、①～④いずれの海戦も基本事項であるため、解答は容易である。

Bはアジアにおける海洋交易と船舶の動力源の変化に関する文章から出題。

問4では、古代ギリシアの自然哲学や薬学について、タレスの思想と宋応星の著作について問われた。単純に人名を覚えているだけではなく、その思想の内容まで問われていたので、文化史が手薄になっていた受験者は取りこぼしがあった可能性がある。

問5は、チャンパーの位置が地図上で問われた。2世紀に成立したインド文化の影響を受けたチャンパーの名称と位置を答えるのはやや難しかったように思える。これも受験者によっては差が付く問題である。

問6は、世界史上の船に関する出来事について幅広い時代と地域で問われた。アテネの三段櫂船は基本的な内容のため、解答は容易である。

Cは人類の重要な資源である木に関する文章から出題。

問7は河川や水路の整備・開発についてスエズ運河、テネシー川流域開発公社、アスワン＝ハイダムの建設について年代整序の形式で問われた。aが第二次世界大戦前の出来事、bが世界恐慌の時期の出来事、cが戦後の出来事であることから解答を導き出したい。

問8では、木材や鉄に起案する歴史について、波線部の正しいものを選択する問題である。サハラ以南のアフリカの歴史についての習熟度が問われた問題であった。

問9では18世紀の植物分類学のリンネや、19世紀のゲーテの作品名が問われた。文化史は受験者が手薄になりがちな分野である。偏りのない学習が必要であろう。

今年度の「世界史B」受験者数は87,564人で、昨年度の84,131人から大幅に3,343人増加した。平均点は65.44点で、昨年度の67.25点よりも1.81点下回った。標準偏差は20.31から22.80とやや大きくなった。平均点は多少下がったものの、受験者の数が大幅に増えていることを考えると、例年並みの結果であったと言える。平均点が年度によって大幅に上下することが無いような出題を今後も継続していただきたい。

「世界史B」受験者で「日本史B」「地理B」「倫理、政治・経済」のいずれかを受験した、いわゆる地歴・公民で2科目受験した国公立文系受験者の数は、25,234人であった。同様に、「日本史B」受験者で「世界史B」「地理B」「倫理、政治・経済」のいずれかを受験した者は27,377人であった。「世界史B」の受験者数が87,564人であり「日本史B」の受験者数が167,514人であ

ることを鑑みれば、「世界史B」受験者は国公立文系の受験者、つまり比較的学力の高い層の割合が非常に高いことが想定される。「世界史B」の中だけではなく、「日本史B」「地理B」との平均点の差がばらつかない問題作成をしていただきたい。

センター試験の「世界史B」の問題は、高等学校における学習活動の成果がセンター試験の結果として反映しやすい問題が非常に多い。出題者の方々に深く敬意を表したい。センター試験入試に求められているのは、受験者の高等学校における学習活動が可能な限り平等に評価される問題であり、決して受験者を落とすための奇問・難問を出題することではない。学習指導要領の内容を鑑み、教科書の内容を逸脱しない範囲において、高等学校の授業内容に即した出題を今後も続けていただきたい。

また、今年度のセンター試験の問題を見ても、高等学校の授業内容をきちんと理解した受験者がしっかりと解答できる良問が多く出題されている。次年度以降も、同様に問題を出題していただきたい。一方、設問によっては受験者が考えずとも解答できてしまう問題も見受けられる。また、図版や絵画等が問題に直結せず、解答をする際に必要のない資料の添付も見られる。リード文が大変読みやすく、また興味深い内容であり、受験者の歴史への興味関心を喚起するものが多いだけに、そのリード文を受験者が活用して解答する問題を多く問題作成していただきたい。知識や理解といった基本的な部分を疎かにせず、しかしながら、ただ暗記した事項を答えるだけの問題ではなく、解答へ至る思考力が問われる問題が多くなることを願っている。そういった意味においては、第1問のC問8のグラフ読み取り問題や、第2問のB問6の問題などは、受験者の思考力を測るための良問と言える。平成32年度からの大学入学者選抜における共通テストについての改革を見据え、そうした設問の在り方についても検討していただきたい。また、出題範囲について日本史との整合性を検討していただき、世界史と日本史で差が出ないように配慮していただきたい。

### 3 ま と め

今年度のセンター試験も、例年どおり、基本的には我々の日常の教育活動を踏まえた上で問題作成されており、取り上げられたテーマが世界史の学習において示唆に富むものであることは、率直に評価したい。

しかしながら、やはり例年と同様、知識・理解を問う無難な説問が多い。また「世界史A」については、科目の性格・特性にやや配慮に欠く出題も見られた。問題の作成に当たって、極めて多種多様の制約がある中で、意欲的に新たな問題分野を開拓することが困難な状況であるということは推察した上で、あえて苦言も呈した。それは、このセンター試験が入学試験のスタンダードとして、全国の高校生にとっては世界史学習上の極めて重要な一つの基準になっており、私たち高等学校世界史教師にとっても、授業の内容・方法を考える上で、やはり重要な参考資料として受け止めているからこそである。本センター試験が、より一層私たちの教育活動の指針にできるものとなることを願って止まない。

また、これは「世界史A」「世界史B」だけの課題ではないが、各教科間、とくに「A科目」間、「B科目」間の平均点のばらつきについては、極力最小限に留めるようにしていただきたい。2.(2)でも触れたが、「世界史A」「世界史B」の問題が適正なものと評価されても、他科目との平均点との差が大きければ、結果的に受験者の学力が正当に評価されないことになってしまう。問題の難易度や他教科との平均点の差などの、いわば受験科目による「運・不運」によって受験の結果が左右されることがあってはならない。

センター試験のより一層の充実を期待して、本協議会の提言としたい。